

住宅の維持保存・継承に関する研究 —鶴巻鶴一郎（現・栗原邸）の事例—

日大生産工 ○亀井 靖子

1. はじめに

東京駅の復原を始め公共建築の維持保存への市民意識は以前に比べて随分高まってきている。一方で、個人所有である住宅は、経済的理由や遺産相続、維持管理の難しさ等から取り壊されてしまうことが多い。

そこで本研究は、住宅の維持保存・継承の事例から、住宅の維持保存・継承が成立するための構図を明らかにすることを目的とする。そこでまず住宅の維持保存専門家と住宅建築に興味を持っている人を対象に調査を行い、人々の建築への関心を高めるための方策を模索する。本報告はその足掛かりとして鶴巻鶴一郎（現・栗原邸）の事例をまとめたものである。

2. 調査概要

2.1 調査方法

調査はアンケート調査とヒアリング調査を行った。アンケート調査は、栗原邸の一般公開（平成25年6月1日（日）、2日（土））に合わせ、来館者210名を対象に行った。内容は年代・職業等の基本事項、見学会参加理由、建築歴、義務教育時代の建築環境・経験等についてである。

ヒアリング調査は、栗原邸の維持保存・修復に関わり、一般公開の実施担当をしている東京工芸繊維大学助教の笠原一人氏を対象に、栗原邸が保存・修復され、一般公開されるまでの経緯を伺った。

2.2 調査対象

鶴巻鶴一郎（現・栗原邸）は1929年、本野精吾により設計された。1941年、鶴巻氏から栗原伸に売り渡されている。鶴巻邸は「鎮ブロック」を剥き出しにした中村式鉄筋コンクリート建築が特徴で、2007年ドコモモジャパンに選定され、2013年には登録文化財に登録された。2011年度より京都工芸繊維大学大学院の教育プログラムの一環で修復作業が始まり、2013年6月現在、屋上防水と室内3室の修復が完了している。鶴巻鶴一郎の概要については表1に示す。

3. 調査結果

3.1 来館者の属性

来館者の男女比は男91名・女116名で、女性が若干多い。住まいは「市内」が全体の67%（140名）と多かったが、「府外」も25%（51名）と多く、その内訳は大阪17名、兵庫7名、東京4名等であった。

図1は住まい別男女比を示す。「市内」では女性の割合が高いが、「府外」になると男性の方が高く、男

性は遠くからも見学会に来ていることが分かった。

来館者の年代は10代～70代以上まで幅広かった。その内訳は20代が最も多く21%（44名）であった。次いで60代20%（41名）、50代19%、40代19%であった。大学院の教育プログラムとして修復が行われたことから、20代の割合が高かったと思われる。

3.2 見学会の情報源

図2は年代別見学会情報源を示す。新聞から情報を得ているのは40代よりも上の年齢のみであった。10代・20代は、インターネットでの情報収集が多いと予測したが、知人・友人などからの情報源が5割を超えていた。インターネットを情報源としているのは、30代が格段に多かった。

表1 鶴巻鶴一郎の概要

掲載紙	年	内容
	1929年	鶴巻鶴一郎 竣工
	1944年	本野精吾逝去
	1999年	近代化遺産調査にて栗原邸確認
川島智生「本野精吾の鶴巻邸について」 日本建築学会大会学術報告集（東北）2000年9月、pp23-24	2000年	
藤森照信「原・現代住宅再見」 「TOTO通信」第45巻第1号、東陶機器株式会社社宣伝部、2001年4月、pp42-46	2001年	
すまい再発見「すまいらん」第63号、 住宅総合研究財団、2002年7月、pp66-67	2002年	
	2005年	栗原邸 一般公開 （11月文化庁建物公開と合わせて）
	2007年	docomomo japan選定
	2008年	栗原邸 一般公開
	2009年	屋上防水修理開始
		構内（長男）逝去 所有者 栗原真達へ移行
	2010年	本野精吾展開催
	2011年	京都工芸繊維大学 「建築リソースマネジメントの人材育成」
		屋上防水修理完了
		室内3室の修復作業
		栗原邸保存研究会発足
三ツ星Gallery「和」田島ルーフイング社内報No. 356 2012年12月	2012年	
地元紙「リビング」、毎日新聞（京都市内）（5月27日）、京都新聞（5月24日）	2013年	栗原邸 一般公開
		登録文化財に登録

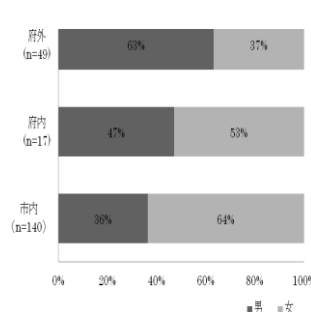


図1 住まい別男女比
(n=206)

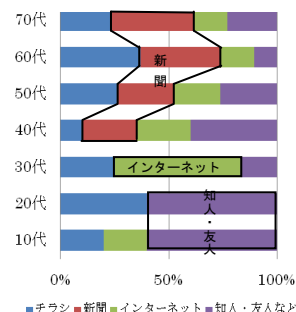


図2 年代別見学会情報源
(n=115)

3.3 来館のきっかけ

図3は、住まい別に、来館の最も大きなきっかけを示している。「府外」からの来館者は、「近代建築への興味」が53%と半数を超えている。「市内」からの来館者は、「近代建築への興味」が29%で、「建築全般への興味」23%とあまり変わらなかった。一方で「友人に誘われて来た人」が14%、「地元紙や新聞などの紙媒体を見て来た人」が15%を占めている。近所であることから気楽に来館していることが分かる。

図4は住まいと来館のきっかけ（複数回答可）を示している。「市内」と「府外」で来館目的の明確さに差がある。「府外」からの来館者は「本野精吾に興味がある」というきっかけが、他のきっかけに比べて多くなっており、来館目的が定まっていることが分かる。一方、「市内」からの来館者は漠然とした建築への興味で来館していることがわかる。

図5は、職業別に、来館の最も大きなきっかけを示している。「建築」は建築関連の職業、「その他」は建築以外の職業、「未記入」は学生と無職で、グラフは「建築」の回答が多かった順番となっている。「その他」は「建築全般に興味がある」より「近代建築に興味がある」の方が圧倒的に多く、より狭義のきっかけで来館している。

図6は、職業別来館きっかけ（複数回答可）を示している。「その他」と「未記入」はほぼ同じような傾向を示している。「建築」は「保存に興味」と「本野精吾に興味」が他に比べ多くなっており、明確な目的があることが分かる。

図7は見学会への参加経験の有無と最も大きなきっかけを示している。今までに似たような見学会への参加経験が「ある」人は近代建築や建築全般に興味を持っている人が半数を超えている。一方、そのような経験が「ない」人は「ある」人に比べ、友人・家族等に誘われて来館した人の割合が多い。さらに特記すべきことは、地元紙や新聞などの紙媒体をきっかけに来館している人が9%、近所であることから来館している人が6%いることで、これらは、見学会への参加経験の「ない」人のみに見られたきっかけであった。

4. まとめ

- ・年代によって見学会の情報源が異なることから、幅広い年代に興味を持ってもらうためには、さまざまな方法で情報を流す必要がある。
- ・市内や近所の人は、地元紙や新聞などの紙媒体をきっかけに来館することから、ローカルな情報誌への情報掲載も建築に関心を持ってもらうには効果がある。
- ・見学会への参加経験のない人にとって気楽に参加できる身近な事例は、建築への関心を高めるために効果がある。

5. 謝辞

本調査を行った遠藤由香里、太田沙織、小林恭子、丹波順希（学部4年生、平成25年度）に感謝します。

参考文献

- 1) 建築家本野精吾展—モダンデザインの先駆者—, 本野精吾展カタログ, 2010年

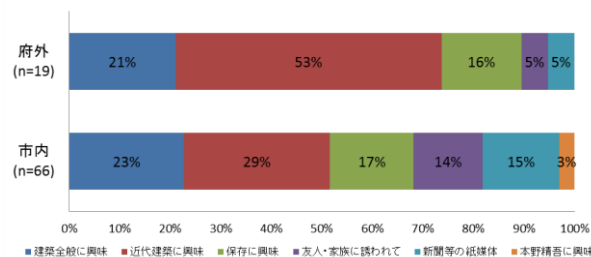


図3 住まいと来館の最も大きなきっかけ

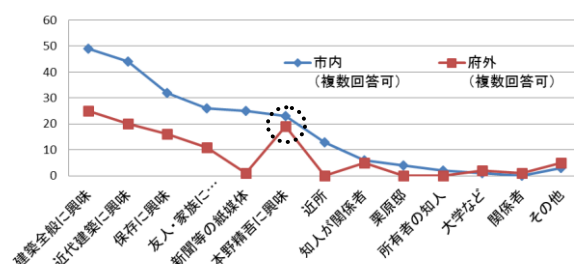


図4 住まいと来館のきっかけ(複数回答可)

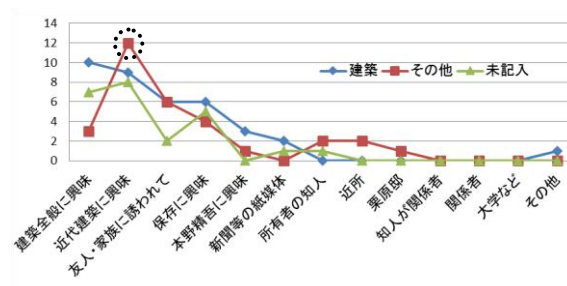


図5 職業と来館の最も大きなきっかけ(n=92)

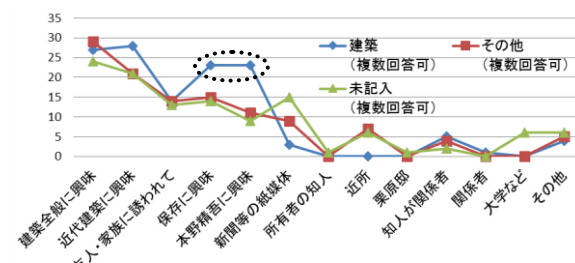


図6 職業と来館のきっかけ(複数回答可)

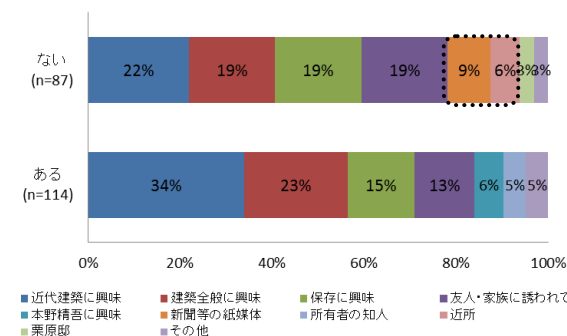


図7 見学会への参加経験の有無と最も大きなきっかけ